

# 選択授業におけるパラスポーツの導入実践に向けて

2018

橋本 直子・重元 賢史

広島大学附属中・高等学校  
「中等教育研究紀要」第65号別刷

# 選択授業におけるパラスポーツの導入実践に向けて

橋本直子・重元賢史

本校では、これまで高校2年生次の授業カリキュラムの中で、約15時間～20時間で種目選択の授業を設定し、実施してきた。今年度は、2020東京オリンピック・パラリンピック開催を見据え、男女共習で展開する「ニュースポーツ」・「パラスポーツ」の教材化を進めた。本稿は、生涯スポーツの観点からその歴史を学び、パラスポーツへの理解を深め、共生社会の実現に向けての人材育成を図ることを目的とした授業実践の報告をまとめたものである。

## 1. はじめに

2020東京オリンピック・パラリンピックの開催決定を契機に、学習指導要領改訂の中でもオリンピック・パラリンピックを通じた学びの重要性について触れられるようになった。日本国内においてもオリンピックやパラリンピックの名がつく教育プログラムが様々な形で実施されている。中学校と高等学校の学習指導要領では、体育理論領域において、オリンピックをはじめとした世界規模のスポーツイベントに関する意義や価値、また、その課題について指導していくことが明記されている。具体的に高等学校学習指導要領解説保健体育編では、以下のように示されている。

現代のスポーツは、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしており、その代表的なものにオリンピックムーブメントがあること、オリンピックムーブメントは、オリンピック競技大会を通じて、人々の友好を深め世界の平和に貢献しようとするものであることを理解できるようにする。また、競技会での勝利によって賞金などの報酬が得られるようになるとドーピング（禁止薬物使用等）が起こるようになったこと、ドーピングは不当に勝利を得ようとするフェアプレイの精神に反する不正な行為であり、能力の限界に挑戦するスポーツの文化的価値を失わせる行為であることを理解できるようにする。その際に、ドーピングが重大な健康被害を及ぼすことについても取り上げるようにする。（高等学校指導要領解説2008）

また、中学校においても、オリンピック・パラリンピック競技大会や国際的なスポーツ大会の開催を通して、スポーツのもつ教育的な意義や倫理的な価値を理解させるとともに、それぞれの国や地域の人々の相互理解を深める礎となることを学び、国際親善や世界平和に大きな役割を果たしていくことができる態度を育成することが必要とされている。

## 2. 目的

このような動きがある中、次世代を担う中・高生にパラスポーツの意義を正しく理解させ、学校の教育活動の中でパラスポーツの体験講座に止まらない教材開発や多様な取り組みを展開していくこと、さらに、自ら率先してバリアフリーやユニバーサルデザインが浸透した生活に関わっていくとする態度を育成することが必要になってくると考えられる。

本校では、これまで高校2年生に対して、約15時間～20時間で男女共習の選択授業（テニス・バレーボール・女子サッカー・太極拳・バレーボール・ゲートボール・ハンドボールなど）を実施してきている。そこに、今年度は「パラスポーツ」という新たな選択肢を設け、生涯スポーツの観点からその歴史を学び、「する」・「観る」・「創る」をキーワードに、パラスポーツへの理解を深め、共に楽しみ、将来、普及活動を推進していく核となり得る人材の育成を図ることとした。

### 3. 授業実践の概要

#### 3-1 期日と対象

表 選択授業の担当一覧

種目	人数
パラスポーツ	男子(21) 女子(21) 42名
テニス	男子(27) 女子(21) 48名
バレーボール	男子(33) 女子(17) 50名
ハンドボール	男子のみ 28名
サッカー	女子のみ 31名

今年度の高校2年生は、男子109名、女子90名の合計199名である。選択競技の種目担当は、保健体育科教員の6名で分担した。生徒の人数については、オリエンテーション段階で、ある程度の目安となる人数を提示し、生徒が第1希望で選択した種目を尊重できるように配慮した。実際の人数については、上記の表のとおりである。

#### 3-2 単元計画

今回のパラスポーツの単元計画(全15時間)は以下の通りである。

- 1) オリエンテーション；パラスポーツとは  
(アンケート調査実施)
- 2) 生涯スポーツより；ゲートボールの歴史と特性、実践学習
- 3) 生涯スポーツより；カローリングの歴史と特性、ニュースポーツ開発への挑戦
- 4) パラスポーツより；アンブティサッカー・ブラインドサッカーの歴史と特性、実践学習
- 5) パラスポーツより；サウンドテーブルテニス、シッティングバレー、車いすスポーツなど
- 6) まとめ；全体を振り返って、自己評価・レポート提出

#### 3-3 事前のアンケート結果

パラスポーツを選択した42名(男子：21名、女子21名)を対象にパラスポーツについての下記のアンケート調査を行った。

- ①『パラスポーツ(障がい者スポーツ)』という名のスポーツがあることを知っていますか。
- ②パラスポーツ(障がい者スポーツ)で、知っているものを答えなさい。
- ③パラスポーツ(障がい者スポーツ)を実際に見たことがありますか。
- ④パラスポーツ(障がい者スポーツ)を実際に行なった(体験した)ことがありますか

表1 パラスポーツを知った理由

テレビ	38
新聞	8
雑誌	0
インターネット	13
乗り物等の掲示板	1
友達との会話	3
家族との会話	2
学校の授業	13
その他	0

①の項目の結果としては、パラスポーツを選択した42名全員がパラスポーツについて知っていた。主にテレビを通してパラスポーツについての情報を収集している傾向がわかった。

表2 知っているパラスポーツ

ウィルチェアラグビー	4
車いすテニス	42
車いすバスケ	42
ゴールボール	3
アンブティサッカー	8
シッティングバレー	10
ボッチャ	14
バイアスロン	4
ブラインドサッカー	37
フライングディスク	5

②の結果としては、特に車いすテニス、車いすバスケ、ブラインドサッカーについてはほとんどの生徒が知っていることがわかった。ブラインドサッカーについては、本校の中学生の総合体育という授業の中でビデオを視聴したことがあるので37名という多い人数となった。

表3 パラスポーツを実際に見たことがある

テレビ	33
新聞	2
雑誌	0
インターネット	1
乗り物等の掲示板	0
友達の紹介	0
家族の紹介	0
学校の授業	5
その他	0

①のアンケートの結果と同様に表3でも「パラスポーツを見たことがありますか」という④の調査項目の解答として、テレビでの情報収集が主であった。

しかし、表4より④の項目ではテレビでは見たことがあるが実際に経験したことがある生徒は2名で、40名が未経験であることがわかった。この2名については小学校のときに車いすですポーツを体験していた。

#### 4. 実施したパラスポーツの実際

今回の選択体育で実施したパラスポーツ実践を振り返るにあたり、生徒たちの関心・意欲が高かったアンプティサッカー・ブラインドサッカー・車いす競技の3つの競技についてのレポートを抜粋しながら考察する。

##### 4-1 アンプティサッカーについて

アンプティサッカーは、上肢あるいは下肢に切断



や麻痺などの障害がある人でもサッカーが楽しめるように考案されたパラスポーツである。

今回の授業では、広島市内に本部があるアンプティサッカーのクラブチームからクラッチを30組借用して実施することが可能となった。授業内容としては、シューズを片方の足だけに履き、もう片方は地面につけない形で拘束した状態で、マーカー間を移動したり、フットサルのボールを用いて室内で簡易なゲームを実施したりした。

<授業後の感想（一部抜粋）>

「アンプティサッカーは、日頃使っていない筋力を酷使する。体験した次の日は筋肉痛で手に力が入らなかった。片足しか使っていないって単純に普通のサッカーと比べて手数が半分になってしまうことなので、ボールが目の前を通り過ぎていく。杖がボールに当たってもいけないのが難しさを上げていると思う。」

「僕はサッカー部だったので軸足がどれほど重要か分かってはいたが、逆にその軸足がないとするとどうすればいいのか、全く分からなかった。」

「実際に体験して、プロの選手たちの凄さを改めて認識した。スピード、正確なパス、動きなど彼らが熱中するスポーツの楽しさも実感した。足の使い方やクラッチの使い方によって正確にボールが蹴れた時、私にとってこのスポーツがより楽しいものになった。」

上記の感想にもあるように、普段の生活では行わない動きやサッカーのルールとは異なる部分があり、身体操作に新たな発見をした生徒もいた。また、クラッチを使ってのボール操作や移動に戸惑いを感じながらも、クラッチの扱いやボールコントロールが思うようにできた時や仲間との連携プレー・シュートが決まった時に生徒たちはやりがいを感じていた。

##### 4-2 ブラインドサッカーについて



ブラインドサッカーは、GK以外の視覚障がいがある人でもサッカーが楽しめるように考案されたパラスポーツである。

今回の授業では、広島中央特別支援学校からブラインドサッカーボール7個を借用して実施することが可能となった。アイマスクは一般に市販されている物を代用した。授業内容としては、二人1組で歩行体験、ボール操作、的当てゲームや、コーラーをつけて簡易な2対2のゲームを行った。

<授業後の感想（一部抜粋）>

「一番情報量の多い、目からの情報が遮断されるため、足の感覚と音を頼りにボールを探す必要があった。シュートやドリブルが難しかったのを体感したと同時に、全体の指示を出すコーラーの役割の重要性をとて強く感じた。」

- ・「視覚を奪われると物事を察知するのに聴覚がとても大事になることがわかった。だから盲目の人が近くにいる時は大声で騒がないようにしないといけないと思った。何かを奪われて初めて、その器官が必要不可欠であるかを知り、また、別の器官で補うようにその器官は他の人よりも精度が高くなることも分かった。ブラインドサッカーは支援者と気持ちが合っていないと難しいが、相手との心理戦みたいで楽しかった。」
- ・「ブラインドサッカーは普段のドリブルの何倍も難しく、初め、視覚がない状態で歩くことは恐怖だった。しかし、仲間の声を信じて次第に走れるようになっていった。普段、駅などで視覚障がいの方を見かけてもどうすればよいか、わからなかったが、視覚なしに行動することの大変さ、また、周りからの声掛けや案内でどれほど安心感を生むかを体験したので、これからは積極的に手伝いをしたいと思う。」

上記の感想にもあるように、情報量の多い視覚を遮断されるため、聴覚や触覚を頼りに慎重に活動する姿が見られた。また、ボールの鈴の音やコーラーたちの仲間を頼りにしてプレーしている姿が印象的であった。さらに、今回ブラインドサッカーを実施して、障がい者が普段どのような感覚で生活しているのか、疑似体験しての気づきが感想にも表れている。特に、店や駅など視覚障がい者の方に出会った時には積極的に手伝いをしたいなどボランティア精神も生まれたのではないだろうか。

#### 4-3 車いす競技



車いす競技は、①ウィルチェアラグビー・②車いすテニス・③車いすバスケットボール・④車いすダンスなど様々な競技が存在する。

今回の授業では、社会福祉協議団体に所属するクラブチームから競技用車いすを7台借用して実施することが可能となった。授業内容としては、ダンスのようなターンしたり、バックしたりといった車いす操作と、事前アンケートでも多くの生徒が高い関心を示していた車いすバスケットボールのシュートを行った。

#### <授業後の感想（一部抜粋）>

- ・「車いすを扱いながらドリブルやシュートに挑戦すると、ボールの感覚が全く異なってとても難しかった。でも、できるようになると面白いと思うので、いつかもう一度やってみたい。ほんの少しだが、今回の授業を通して、障がい者がどんなことで苦労しているのか、体験できた。普段、車いすを必要としない人たちも体験することはとても大切だと思った。」
- ・「今年、1月にあった車いすバスケのドラマを見て、競技用の車いすにとっても関心があった。実際に乗ることができてとても嬉しかった。かなり細かく機敏に動くことができ、感動した。車いすに乗った状態でシュートしたら格段に難しかった。ダンスがあるとは知らず、車いすの側面にシールのような装飾が施されていたり、前輪がカラフルに光ったりするのに驚いた。」

上記の感想にもあるように、車いすバスケットボールなどの競技スポーツの他に、ダンスも存在することを初めて知った生徒もいた。今回借用した車いすはダンス用で、車いす側面のシールのような装飾や前輪の発する光などの工夫に新たな発見があった。医療用とは異なる車いすの動きに初めは驚きも大きかったが、操作に慣れてくると、様々な動きが可能になってきた。

#### 4-4 全体を通して



今回のパラスポーツの実践では、どのパラスポーツも生徒にとって初めての体験であった。特に道具の操作や身体の制限など、日頃の生活や授業の中では味わうことのできない感覚を感じることができたのではないかと。

#### <授業後の感想（一部抜粋）>

- ・「パラスポーツを体験して、健常者も障がい者も様々な人が一緒に楽しめるものがあることが分かった。さらに健常者にはない、卓越した技術を持っていることも分かった。このことを多くの人に知ってもらってもっと普及してみんなで楽しみたいし、努力している選手をもっと応援したいと思った。東京パラリンピックが終わってからも一時的な盛り上がりで終わらせず応援し続けたいと思った。」
- ・「パラスポーツを通して、私たち健常者は障がいを持つ人に対して、同情することではなく、支えが必要なのだということを知るべきだ。パラスポーツはどんどん広まっているが、パラスポーツを通し、互いを知り、足りないところは支え、補い合っていけば、社会全体の障がいを持つ人に対する見方が変わると思う。」

上記の感想にもあるように、健常者と障がい者がお互いに支え合い、共生していける社会を考えていかなければならない。今回の目的でもあるように、「する」・「観る」・「創る」をキーワードに、パラスポーツへの理解を深め、共に楽しみ、将来、普及活動を推進していく核となり得る人材の育成の一助となるような授業実践が行うことができたのではないだろうか。

#### 5. まとめ

今回の選択授業で、パラスポーツを選択した理由として①東京オリンピック・パラリンピックの開催が決まったから、②これまで経験したことのない種目だから、③運動が苦手だからという大きく3つに分けることができた。実際に授業を終えてのアンケートでは満足度100%という結果であった。アンケートの自由記述からは、パラスポーツへの競技への関心が高まり、自分を見つめ直すきっかけづくりになったことが記されていた。体育授業の域を超え、普段の社会生活でのバリアフリーについて問題提起する生徒もでてきた。また、「支える」視点から、スポーツに積極的に関わろうとする生徒や主体的に大会参加・運営などを考える生徒もでてきた。

このように、二年後の東京オリンピック・パラリンピックを見据えてか、生徒の関心は大変高く、意欲的に授業に参加し、活動することができた。実際に体験することで、競技場やその周辺環境整備・用具開発など、自分たちでできることについて考える生徒も現れ、新学習指導要領における4つ目の柱「支える」の視点で捉えようとしている姿勢がうかがえる。また近藤ら（2017）は、オリンピック・パラリンピック教育の中核となる内容は、現行学習指導要領の中学校並びに高等学校の体育理論で示されているような、理念やその教育的な意義と価値、さらには、ドーピングといった負の面であると報告している。今回の高校2年生でのパラスポーツの実践が新しい体育理論の領域として、保健体育のカリキュラム構築の歩みにつながるよう、研究を進めていきたい。また、いずれは選択者だけでなく、より多くの人たちが体験できる形に広げていければとも考える。

ただし、近藤ら（2017）の報告にもあるように、このような保健体育のカリキュラムを構成するにあたり、保健体育科の教員がオリンピック・パラリンピック教育を展開できるようになるための環境整備が大切であるとしている。また、研修などを通じて、中学校や高等学校の教員が、自ら指導案を作成するなど、主体的に参加できるワークショップのような研修形態も重要であると指摘している。

教材開発の途中である現在、授業で使用した用具は、全て、個人の私有物やスポーツセンター、社会福祉協議会、社会法人所有のものである。今後も地域社会からの援助は不可欠であり、何らかの形で還元できるよう、工夫していかなければならない。そのためにも、パラスポーツへの正しい知識と技術の習得をめざして、指導者のスキルアップと教材研究

を図っていきたい。

今回の授業を終え、障害の有無にかかわらず、全ての人が、同じ社会に生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていく力を身に付けることは、真の「共生社会」を実現する上で、障がい者理解を進める教育を一層充実させ、多様性を尊重し、障害を理解する心のバリアフリーを子どもたちに浸透させる必要があるという思いがより強まった。

### <参考引用文献>

- 1) 近藤智靖他 (2017) 中学校体育理論におけるオリンピック教育について-探求的調査を基にした現状把握と課題の提起 オリンピックスポーツ文化研究 No2 47-56.
- 2) オリンピック・パラリンピック教育に関する有識者会議 (2016) オリンピック・パラリンピック教育の推進に向けての最終報告.
- 3) 東京都教育委員会 (2016) 「東京オリンピック・パラリンピック教育」実施方針.
- 4) 文部科学省 (2008) 中学校学習指導要領解説 保健体育編 東山書房.
- 5) 文部科学省 (2009) 高等学校学習指導要領解説 保健体育編 東山書房.